

『花鳥風月』

ほととぎす 鳴きつる方を 眺むれば ただ有明の 月ぞ残れる

ごとくだいじのさだいじん
後徳大寺左大臣

【現代訳】

ほととぎすが鳴いたので、その方角を眺めると、ほととぎすの姿はなく
ただ明け方の空に月が残っているだけだった

ほととぎすは5月に渡来します。動きが速く鳴いた方へ顔を向けた時にはもうそこには姿がなく、夏の最初の一声「初音」を聞くために作者も寝ずに待っていた情景が浮かんできます。和歌と現代訳があまり変わらないシンプルな和歌で、分かりやすく親近感を感じます。

ほととぎすは夏を代表する鳥で、万葉集は150首以上、古今和歌集や新古今和歌集でもたくさん詠われています。

また、ほととぎすの名前のついた植物もあり、花びらの斑点が鳥のほととぎすの胸の模様に似ていることから名付けられたそうです。

NHK朝ドラのモデルの牧野富太郎氏が発見・命名したジョウロウホトトギスにも無数の紫色の斑点があります。植物のホトトギスは秋の訪れを告げる花で9、10月が開花期ですが11月上旬くらいまで咲いているようです。

同じ名前でも夏を感じたり秋を感じたり不思議ですね。

植物のホトトギスを見つけたら斑入り模様が鳥のほととぎすに似ているか確認してみてください。

山陽小野田かるた協会 時吉 陽子